

シティズンシップ教育実践研究センター 活動報告

佐藤裕紀¹⁾、吉田重和¹⁾、武田丈太郎¹⁾、五十嵐紀子²⁾、原口彩子²⁾、西原康行¹⁾

- 1) 新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科
- 2) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科

【背景・目的】1990年代以降、国際社会でシティズンシップ(Citizenship)への関心が高まっている。その背景には、グローバリゼーションの進展や知識基盤社会の到来の中での、国民国家の枠組みや国家と個人の関係性の変質、価値の多様化の中でのコミュニティや社会的結束の欠如に対する危機感の増大があるとされている¹⁾。

そうした中で、シティズンシップ教育が注目され、各国においてシティズンシップ概念、教育の検討がなされている。日本においても、義務教育段階から高等教育段階にいたるまでシティズンシップ教育に関する多様な実践が行われ、ネットワーク化されている過程にある。しかし、一つ一つの事例を集積している段階にあり、その意味や定義のコンセンサスは未だに見出せておらず²⁾、目的、対象や、それらに応じた学習内容の分析と整理は十分になされていない状況がある。

以上の背景から「保健医療福祉スポーツの総合大学における、独自性のあるシティズンシップ教育プログラムの開発」を行うことにより、高等教育段階におけるシティズンシップ教育の分析と整理の進展に貢献することを目的として2015年度に当センターを設立した。

【方法】本研究センターは以下の研究・活動を行う。

- QOL サポーター育成に必要なシティズンシップ教育プログラムの開発、実践
- 地域資源を活用したシティズンシップ教育プログラムの開発、実践
- 上記教育プログラムの開発、実践に伴う調査

現在までに下記の活動を行った。

1. ヒューマンライブラリーin新潟2015の実施

保健医療福祉スポーツの総合大学における独自のシティズンシップ教育プログラムを開発、実践した。具体的には、2000年にデンマークのNGOが開始した「ヒューマンライブラリー」という社会の多様なマイノリティの人々との対話を通じた相互理解と偏見の低減を目指した教育プログラムを新潟の地域に応用し、「ヒューマンライブラリーin新潟2015」として11月14日(土)に学生総合プラザSTEPにて実施した。

2. プログラムの効果分析と報告書の作成

上記プログラムに関わった「学生スタッフの意識変容」、

「当日の参加者及び語り手である当事者の意識変容の様態」を明らかにした。また実施マニュアルと、当センター員による実践に関する考察を収めた報告書を作成した。

【結果】プログラムは、新潟県における初開催となり、11名の当事者の方に語り手役として協力していただいた。また当日は35名の参加者があり、その多くは大学生であった。来場者の意識変容として、マイノリティ理解の促進、視野の拡大、対話の力への認識に関して一定の効果が見られた。また当事者の意識変容として、語りによるアイデンティティの刷新、対話による治療の意味合いが考察された。そして準備段階を含めた学生スタッフの変容という面でも、上記に加え社会人基礎力や市民性の涵養という面でも一定の効果が見られた。

一方で、各テーマに関しての知識共有、学生と教員・学内外での協働体制、単発プログラムにおける効果の限界性等の課題も明らかになった。

【考察】単発のプログラムのみでなく、QOLサポーター育成を目的とした「より体系的なシティズンシップ教育プログラムの開発」の必要性が認識された。具体的には、平成30年度における保健医療福祉教養科目群「シティズンシップ教育入門」の開講を目指し、そのカリキュラム内容の検討、教材の作成を行うこととした。

それに伴い、今後の作業として、①QOLサポーターとして必要なシティズンシップの資質、能力の明確化、②その内容に基づき、全8回のカリキュラムを設計、③国内関連・先行事例の分析、④関連した実践活動の実施、検討を行っていく必要がある。

【結論】QOLサポーター育成に資するシティズンシップ教育プログラムの開発において、体系的に資質・能力を習得できる「シティズンシップ教育入門」の科目内容、そこで使用する教材の作成・検討を今後も当センターでは進めていく。

【文献】

- 1) 中山あおい, 他: シティズンシップへの教育, 新曜社, 2010.
- 2) 日本シティズンシップ教育フォーラム: シティズンシップ教育で創る学校の未来, 東洋館出版社, 2015.